

## 巻頭言 「地に足のついた取り組みに」

宇野 元

キリスト者の礼拝は二重の意味をもっています。私たちがこのことをおぼえるのに「サービス」という言葉が役立つでしょう。この言葉には、奉仕、務め、という、日本でも知られる意味がありますが、英語圏では礼拝を表すときにもよく使われます。私たちの礼拝に含まれている重要な意味が示されます。

新約聖書が礼拝を語る言葉にこうあります。「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマ 12, 1)。「あなたがたのなすべき礼拝」。「なすべき」という日本語訳のなかに、特色ある言葉が隠れています。元の言葉は「理性的な」「健全な」という意味の言葉です。この特色ある言葉が「いけにえ」という宗教的儀式的な言葉とむすばれて使われています。あるいは、「いけにえ」という宗教的儀式的な言葉をいいかえて、礼拝のもう一つの面を示しています。すなわち、キリスト者の礼拝は、日曜日になされる礼拝式のみを意味してはいない。キリスト者の日ごとの歩み、体を伴う生活もまた「礼拝」である。ですから、聖書はつづけて、キリスト者共同体に与えられたさまざまな賜物について言及します(ローマ 12, 3 以下を参照)。キリスト者各人、一人一人が賜物を与えられています。それを知り、日ごとの歩みのなかで表すようみちびかれています。

キリスト者にとって、礼拝は宗教的な儀式のみを意味するものではない。神に仕え人に役立つための日ごとの歩みが、日曜日の礼拝と共に「礼拝」である。このことは礼拝についての一面的なイメージを退けてくれます。同時に、世界のなかで生きている私たちが、熱狂や陶酔に誘われることのないよう守ってくれるでしょう。熱狂や陶酔は、自らの絶対化を生み、自らと異なる人やグループとの対立を生みます。そして容赦ない争いをつくりだします。争いは憎しみを生み、暴力の応酬が生まれます。武力による暴力の応酬と言葉による暴力の応酬が。私たち人間の熱狂、陶酔は、どんなにか破壊的なことか。そしてなんとしばしば、宗教的な儀式と結ばれることか。対立や争いの感情を宗教が和らげることに寄与せず、むしろ助長することがおこることか。古代においてのみならず、現代においてそれが証明されています。聖書が語る礼拝は、私たちを持ち場において特色ある生き方へ向かわせてくれます。熱狂や陶酔でなく、地に足のついた取り組みに。現実をよく見ながら絶望せず、よりよい世界を願い、建設的に考え、語り、行動することに。